調査・研修等計画届出書

令和元年７月１２日

瀬戸市議会議長　様

議員名　髙島　淳

政務活動　として、下記のとおり調査・研修等を実施いたします。

記

期　日	令和元年　７月２９日から　７月３０日まで（１泊２日）	
調査先・研修名	「これからの日本の教育と福祉のあり方」in 東京	
会場名（会場所在地）	TKP 東京駅八重洲カンファレンスセンター 東京都中央区京橋１－７－１戸田ビルディング	
調査・研修の目的 （今回の調査・研修に係る瀬戸市・自己の現状と課題を踏まえて）	テーマ　「大人の引きこもりを考える」 全国的に大人の引きこもりが問題になっている。本市においても、成人でありながら働くことができない市民がいるので、その解決のための行政のあり方や、議員としての考え方を学ぶ。 テーマ「家庭教育支援から教育改革は切り込め」 教育は、学校、家庭、地域の３種類あると考える。この中で、現在においての家庭教育のあり方、文科省の考える最新の家庭教育について学ぶ。	
議長名の依頼	要　・　不要	依頼先（名称）
同行者名	なし	

※行程表を添付してください。

調 査 ・ 研 修 等 報 告 書

令和元年１０月　２日

瀬戸市議会議長　様

議員名　　髙島　淳 ㊞

政務活動として、下記のとおり調査・研修等を実施したので報告します。

記

期　日	令和元年　７月２９日から　７月３０日まで（１泊２日）
調査先・研修名	「これからの日本の教育と福祉のあり方」in 東京
会場名（会場所在地）	TKP 東京駅八重洲カンファレンスセンター 東京都中央区京橋１－７－１戸田ビルディング
調査・研修の目的 （今回の調査･研修に係る瀬戸市･自己の現状と課題を踏まえて）	テーマ　「大人の引きこもりを考える」 全国的に大人の引きこもりが問題になっている。本市においても、成人でありながら働くことができない市民がいるので、その解決のための行政のあり方や、議員としての考え方を学ぶ。 テーマ「家庭教育支援から教育改革は切り込め」 教育は、学校、家庭、地域の３種類あると考える。この中で、現在においての家庭教育のあり方、文科省の考える最新の家庭教育について学ぶ。

調査先の事業の現状・課題　／　研修で学んだこと・キーワード等

議員セミナー 東京
大人の引きこもり問題を考える

引きこもりとは
仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに6ヶ月以上続けて自宅に引きこもっている状態のこと。買い物などで時々外出する場合も「ひきこもり」にふくまれる。　　厚生労働省の定義
8050問題
名付け親は大阪府豊中市社会福祉協議会所属のコミュニティ・ソーシャルワーカー勝部麗子である。引きこもりの若者が存在していたがこれが長期化すれば親も高齢となり、収入に関してや介護に関してなどの問題が発生するようになる。これは80

代の親と50代の子の親子関係での問題であることから「8050問題」と呼ばれるようになった。該当している親子の親には収入がなくなっている状態であり、様々な理由から外部への相談も難しく、親子で社会から孤立した状態に陥っている。

引きこもりは病気ではない
病気の場合は統合失調症の症状の場合もある
様々な要因によって引き起こされるので、対応するのは困難。

特徴として
自分の欲求がわからない。
楽しみがわからない。
欲求を満たすために仕事をする。
しかし、それがわからなければ、生物的に生きていくことのみ
衣食住が最低限できれてればいい。

親が現役の場合、あまり表に出てこない。世間体が悪いから
親の収入が少なくなった時、問題が表面化する。
引きこもりが続くことで、社会とのつながりが断たれ社会的貧困の状態になってしまう。
引きこもりが多くなって引き起こされる問題
市民の担税力の低下
支援に莫大な予算が必要
社会的貧困状態に陥る
単身未婚世帯の増加　少子化
年金 国保などの社会保障制度の影響
ひきこもり世帯の高齢化による生活状況の悪化
生活保護世帯の増加
虐待、自殺に発展する可能性

社会投資として考える
予防するコストを考える。
不登校、ひきこもり、ニートなどの予防ができれば、就職、税収、高齢者支援など解決できる。
しかし10数年かかるかも
引きこもりはそもそも若者の問題出会ったため39歳までしか調査がなかった。
高齢になれば対策費としてかかる金額が増えていく

行政支援の現状と課題
コミュニケーションが苦手な方が多いので、支援の過程で、担当者が変わると継続しにくい。
同じ人材が続けて支援していくことで、自立しやすくなる。

瀬戸市においては地域若者サポートステーションは15歳から39歳までの支援がある。

引きこもりに対してのアンケート結果によるときっかけについては不登校がトップである。

毎年約3万人の子供が不登校のまま卒業していく。
過保護、過干渉から不登校
ネグレクト、放任から不登校
親が学校を休むことを容認している
から不登校になる

家庭教育支援から教育改革は切り込め（２日目）
家庭教育は家庭学習とは違う
家庭教育は親が子供に家庭内で、言葉や生活習慣、コミュニケーションなど生きていく上で必要なソーシャルスキルを身につける援助をすること

学校教育の土台となるもの
基本的倫理観、社会的なマナー、自制心や自立心を養う上で、重要な役割を担う。
子供の教育のはじめの責任は親、保護者にある。
子供は本来ならば、地域と学校と家庭が担っていた。
現在においてはこの仕組みが崩壊している。

地域社会の希薄化
家庭教育を充実させると集団生活に必要な自立心や社会性を家庭で伸ばした子供が増える。よって、教師が授業に集中できるので、学力向上効果が現れる。

全ての教育のベースが家庭教育
家庭教育の重要さを浸透していくためには家庭教育支援条例を作る方法がある。
熊本が全国でも最初に条例を制定した。

子育てセミナーを企画する場合はアンケートを必ず取り、集計分析する。
アンケートは事前に成功ラインを決めておくことが必要。内容、講師、動員など。

家庭教育支援チーム
以前は親が家庭教育の学習について積極的であった。参加型子育てサロン
現在においては保護者のニーズが変わってきている。外でのコミュニケーションが少ない。
お節介な訪問型家庭教育支援が必要ではないか。

訪問型家庭教育支援チーム
瀬戸市にも家庭教育支援チームが必要ではないか。
訪問型家庭教育支援チームの先例
和歌山県湯浅町の家庭教育支援(ユニバーサル型)
大東市モデル ベルト型訪問型家庭教育支援(例えば1年生だけ)

家庭教育は予防開発型で、問題解決型ではない

研修（受講後の感想）瀬戸市への反映・自己の能力開発への寄与等)

近年、大人のひきこもりが全国的に増加傾向にある。いわゆる８０５０問題と言われるもので、50代のひきこもりを抱えて大変困難な生活をしている高齢者の家庭が存在している。
聞くところによると本市でも推計500人以上とされている。このような方々に対しての支援や補助は状況の把握が難しいこともあり、あまり進んでいないように感じた。
また、大人のひきこもりの原因を探ってみると、学齢期から不登校になってしまった方がそのままひきこもりになるケースが多いことがわかった。であるならば、学生のうちに、学校の先生のサポートや、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーなどの支援により社会復帰させることができれば、未来において大人のひきこもりの数は減ってくると思われる。
しかし、瀬戸市の対応としては義務教育期間が終わってしまった方についてのサポートが途切れてしまう状況があり、今後の課題であると感じた。

子供の教育の第一義責任は保護者にあり、家庭教育をしっかりとして行くことが将来において、子供の健やかな成長を支えるものである。近年は核家族化、ひとり親家庭などの増加により、周りに相談もできず、不安で困難な子育てをしている家庭が多く存在し、そのような過程を支援して行くためのさらなるサポートが今後必要になって行くものと思われる。本市においてはこの点が弱いところであり、次代を担う子供達のためのさらなる施策が必要になると感じた。